『明月記』における瘧疾の検討（続報）

日本医史学雑誌第三十四巻第三号
昭和六十三年七月三十日発行
昭和六十二年九月十四日受付

中村　昭

はじめに

『明月記』[一、二]は鎌倉時代の著名な歌人藤原定家が生涯にわたって書いた日記である。そのうちいくらかは散逸したが、大部分は定家の後裔である京都の冷泉家に保管され、我々はすでに印行されている本を利用することができる。

前報[三]では定家の父俊成と定家自身と息子為家の瘧（マラリア）の症状を中心として論述した。しかし、定家は『明月記』においてそれ以外の人々の瘧の症状についても見聞するままに記載しており、またその他の残された問題もあるので、ここに前報の足らざるを補い論考を追加し、諸賢の御批判を俟ちたいと思う。

なお、前報において為家の長男を為家と誤記したが、為氏が正しい。なおさらにつけ加えれば、為家の後妻、阿仏尼の生んだ子為相が冷泉家の祖である。

一　藤原定家の慢性咳嗽

前報ではあまり書かなかったが、定家は『明月記』において自身の咳嗽のことを非常に屢々書いている。終生にわたってそれは続いている。『明月記』を通読すれば誰でも気がつくことである。かつて国文学者の石田吉貞氏は『藤原定家の研究』[四]において、これは結核性気管支炎でもあったのだろうかと述べたが、服部敏良氏[五]はそれを否定し、持病として気管

支喘息があったのだろうと論じられた。私は石田氏の意見にも賛成できず、服部氏の見解にも疑問を感じるものである。

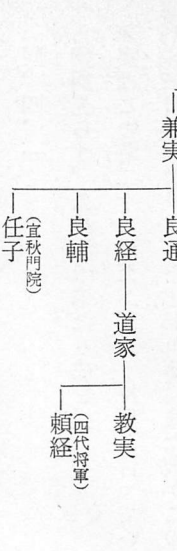
定家の呼吸器の病状経過は服部氏も述べているように肺結核とはまったく異なるので、これは論じるまでもない。それでは気管支喘息はどうであろうか。周知のように喘息という病気は喘鳴を伴なう発作的呼吸困難が主体であって、咳嗽は副次的なものである。しかるに定家は『明月記』において喘鳴とか呼吸困難とかいうことは一度も書いていないのである。定家がそういう表現を知らなかったということは考えられない。何故ならば、彼は元久元年十一月に父俊成の臨終の症状を記述した時に、喉が鳴ることに気をとめて、これは喘気病であろうか、あるいは冷たいものを食べて咳病の故に鳴るのだろうかと書いている。すなわち、喘気病と咳病の違いを知っていたのだから、自分に喘気或は喘鳴があればそれを書かないはずはない。

服部氏[五]は『明月記』に屢々書かれている心神悩乱というような表現に呼吸困難ということを含んでいたのだろうと述べているが、これは少し無理と思われる。瘧疾（マラリア）は実際に心神悩乱することが多いから、その通りに定家は書いたのだと私は思う。慢性咳嗽は要するに慢性気管支炎なのだが、マラリアでは気管支炎による咳嗽を伴なうことが多いということは近代マラリア学[六]によって指摘されている。急性マラリアの症状が無くなってもそれで完治するのではなく、慢性マラリア症となる患者が多かった。ただしすべての慢性マラリア症が慢性咳嗽を呈するわけではないから、定家の場合は幼時の既往症等も素因をなしていたのかも知れない。

石田氏[四]は定家の多様な心身の不調を一元的に解釈できないものだろうかと、医学者に対して問題提起したのだが、彼の心身悩乱、憂鬱症、慢性咳嗽、関節痛、神経痛あるいは風病等の症状はマラリアで説明できると思う。マラリアは全身病でどんな症状も起き、起きないのは妊娠だけだとも言われるが[七]、定家の症状を強いてすべてマラリアだけで解釈する必要はなく、他の合併症もあったことは否定できない。

二　九條家の人々の瘧疾

始めに九條家について少し説明しておく。その始祖は兼実であり、父は藤原忠通であったが、九條の地を与えられて邸を構え、以後九條を名乗った。兼実は源平の争乱期に頼朝の信頼を得て、その推薦によって文治二年に摂政、藤原氏の氏の長者となった。一方、定家は藤原一族でも家格は低かったが、この頃九條家の家司になることによって出世の緒口をつかんだ。それ故定家は屢々九條家に出仕し、九條家の人々の疾病についても『明月記』に記載が多いのである。九條家の系図(八)を本稿と関係のある部分だけ掲げておく。



一、兼実

兼実の瘧疾については『明月記』に記載がないが、兼実の日記『玉葉』(九)には記されているので摘録しておく。以下、引用文の振り仮名および（　）内の注は私がつけたものである。

「嘉応二、三、二十四

夜半に及び持病更発す。今日術無し。此の日心神殊に悩む。若しくは是発心地(おこりここち)の体か。

同、三、二十五

日来風病更発の気有り。昨日又殊に倍増す。今朝頗る減有り。

同、三、二十六

発心地に依り参仕せず。

同、三、二十八

法印公舜を請ひ受戒す。午の刻発り了んぬ。

同、四、一

瘧病発らず。公舜法印来たり戒を授く。」

兼実はこの時二十二歳だが、もう持病と言っている。このように一日おきに発っているので彼自身も書いているように瘧病（三日熱マラリア）と思われる。また彼がこの時受戒しているのは病気の治療のためである。それが有効と思われていた。

「寿永元、八、一

余の病悩例の如し。風病か。温気火の如し。終夜悩乱す。

同、八、三

申の刻又更発の心地か。但し瘧病に非ざるか。

同、八、五

余瘧病の発日たるの上、又物忌に当り、此の講中間に退去す。」

これも同様である。漢方医学の理論では瘧の原因は風であるとされているから、風病と言っても瘧病と言ってもそれ程違うことを言っているのではない。

この他彼の日記には脚病、脚気についての記述が非常に多い。「脚病堪へ難し」「脚気不快」「脚気更発に依り練り歩く能はず」「脚病を扶け出仕の間、去る十四日より殊に増し、更に起居する能はず」等々である。これがビタミンB_1欠乏症としての脚気であるかどうかは問題があるが、漢方でいう所の風病の範疇に入る脚気であることは間違いない。これが瘧病とともに彼の持病の病像を形成していた。

二　良経

「正治元、七、二十二

殿（良経）此の間御不例。両若君又瘧病を煩はせ給ふ。」

この年は瘧が大流行し、定家やその家族も皆侵されたことは前報で述べた。

三　兼実妻

「正治二、九、二十七

寅時許（午前四時頃）女房の告げあり、仍ち営み参ず。北政所（兼実妻）俄かに丑時許（午前二時頃）より御悩。女房云ふ、心地振はせ給ふ、又温気（熱）御す。

同、九、三十

北政所又重ねて発らせ給ふ。火急の由申さる。仍ち驚き騒ぎ参上す。但し別の事聞き出ださず。

同、十、一

北政所夜前今朝頗る宜しく御す。

同、十、二

午終許（午後一時頃）御堂に参ず。北参所発らせ給はず云々。」

この場合はあまり定型的な発熱ではなかったらしい。また大騒ぎする程病状は重くなかったらしい。瘧もある程度経過

すると患者の免疫機構が働いて熱型が崩れて来る。このことについて阿仏尼は『十六夜日記』(一〇)の中で次のような興味あることを書いている。

「やよひの末つかた、わか〳〵しきわらはやみにや、日ませにおこること二たびになりぬ。」

わらはやみとは瘧を平安時代の言葉で言っているのだが、それが若いということはまだ熱型が規則的で一日おきに発熱することを指していると思われる。日ませという言葉は『頓医抄』(一一)には間日と書かれている。

四　良輔

「建仁二、二、四

中将殿（良輔）発心地、今日三度（目）、未終許（午後三時頃）発らせ給ふ。

同、四、一

羽林殿（良輔）今日発心地第三度に依り、弘誓院に御坐云々。

元久元、六、十四

二位殿（良輔）御発心地、今日又発らせ給ふ云々。覚実僧正加持（祈禱）。

同、六、十六

二位殿御発心地、今日五度（目）云々。」

この良輔殿は定型的な発作をくり返す患者だったようである。

五　道家

「正治元、七、二十二

殿（良経）此の間御不例。両若君又瘧病を煩はせ給ふ。」

前出。この若君のうち一人は道家であろう。

「元久元、三、二十三

若君（道家）発心地今日四度（目）云々。御祈等ありと雖も験無し。発らせ給ふ。」

この頃鎌倉時代前期はまだ薬物療法があまり行われず、治療の主体は祈禱である。鎌倉時代も後期になれば梶原性全が『頓医抄』[一一]で詳細に書いているような薬物療法がかなり行われるようになる。

六　宜秋門院（兼実娘）

「建保元、八、十五

宜秋門院又御瘧病三度云々。今日参ぜんと欲するの間、当番の上事毎に違ふに依り遠路堪へ難く、黙止せり。」

一日おきに発熱するのだから、毎回見舞に行くのも大変なので、今日は黙っていようというわけである。

「同、八、十七

宜秋門院に参ず。師朝より伺候云々。暫く談話し退出す。一昨日未時（午後二時）発り御す。己に申の刻（午後四時）に及ぶ。女房に謁す。人々頻りに時下りたる由申す。験者阿闍梨退出す。」

日本の土着の瘧は三日熱マラリアだったので、隔日に大体同じ時刻に発熱するのが普通だった。それ故その時刻が過ぎても発熱しないと、今日はもう大丈夫だと人々が話し合い、験者も退出したのである。

三　西園寺家の人々の瘧疾

西園寺家も藤原一族であり、公経が中興の祖と言われる。公経は源頼朝の妹婿一條能保の娘と婚姻を結ぶことによって鎌倉幕府とのつながりを得た。その後、九條道家に嫁した公経の娘が生んだ頼経は、三代将軍源実朝が殺された後四代将軍として鎌倉に迎えられた。西園寺家も九條家と同じく、鎌倉幕府の後楯によって京都でも羽振りをきかせたのである。定家はこの西園寺家の女子と結婚し、それによって物心両面で多くの利益を得た。おそらく恋愛結婚だったのだろうと石

田氏[四]は述べている。その際、定家の和歌が大いにものを言っただろうことは想像に難くない。西園寺家の系図[四、八]も要点のみ掲げておく。

- 公通
  - 実宗
    - 西尼上（定家妻の養母）
    - 公経
      - 女子（定家妻）
      - 実氏
        - 女子（九條道家妻）
        - 公相
          - 女子（後嵯峨中宮）
          - 女子（後深草中宮）

一　実宗

「建久七、六、二十三

巳時許（午前十時頃）一條殿に参ず。御不例朝の間還御す。昼の後毎日発らしめ給ふ。但し朝の間と雖も猶温気御します。」

二種のマラリア原虫に同時に侵されると三日熱でも毎日発熱することがあると言われる[六]が、この実宗の毎日の発熱がそれに当るかどうかは定かでない。

二　西尼上

「建暦二、二、十四

西尼上発心地悩まる。一昨日其の気有り。

同、二、二十

西発心地重ねて発らる。

同、二、二十六

西発心地、幸縁律師護身、形の如く発らる。仍ち中将（実氏）牛を引かる云々。」

祈禱してくれた律師に引出物として牛を贈ったのである。

「同、七、二十

尼上又所悩太だ重し。発心地の如し。

同、七、二十一

九條（西尼上）発心地重ねて発る。衰損の身太だ危急。」

一般的に三日熱マラリアはあまり死亡率が高くないが、老衰などが重なっていれば危いのは当然である。

「同、七、二十二

申時許九條に向かふ。今日発日に非ず。

同、七、二十五

女房（定家妻）九條に行く。発日に依って也。秉燭の程（灯ともし頃）帰る。今日聊か宜しく発る云々。」

西尼上は定家の妻の養母だったから、彼女は実家のあった西九條へ屢々見舞に行ったのである。

「同、八、十

辰時許（午前八時頃）嵯峨に向かふ。又言談尋常例の人に異ならず。一時許後発気有り。心神不快云々、但し殊なる事無し。猶念仏退転せず。」

定家は妻の養母をしばらく彼の嵯峨の山荘に引き取って面倒を見たのである。西尼上はこの後健康を取り戻し、これより十四年後に八十八歳の高齢で亡くなった。

三　公経

「寛喜三、七、十八

大相（公経）一昨日より瘧病云々

同、七、二十一

相門（公経）発心地の疑只事に非ず。耳腫れ給ふの故、小温気減に付く（熱が下った）云々。」

耳が腫れたというのはマラリア発作の際、口唇、顔面、耳朶等にヘルペスが出ることがあるので、おそらくそのためであろう。

四　九條道家妻（公経娘）

「寛喜元、九、十七

興心房消息（手紙）

昨日未時許北政所（道家妻）俄かに悩ませ給ふ。仍ち召され、近辺の小屋に居り在り、頻りに参上云々。

例の御邪気か。更に緩怠（軽快）すべからず。太だ不便の事か。」

興心房という僧医が定家の所へ寄越した手紙の内容を書きとめたものである。

「同、九、二十六

北政所例の御邪気発らせ給ふ。此の御持病更発の時惣て只惘然、是非分別無きの間、旁ら穏かならず。」

例の御邪気と言っているがやはり瘧であろう。これの発作の時、意識昏迷状態となる特徴がよく記述されている。

五　西園寺家姫君

「嘉禄元、四、四

夜に入り相国（公経）亭に参ず。姫君瘧病猶其の気有り云々。」

姫君というのは公経の息子実氏の娘と思われる。実氏の娘の一人は後に後嵯峨の中宮となり、他の一人は後深草の中宮となった。深窓の姫君と言えども蚊の刺螫を免れることはできなかったのである。

四　その他

前報および本稿で述べた通りこの頃は瘧病が非常に蔓延していたので、ほとんどの人は子供の時に初感染したと思われる。それ故にわらはやみという言葉もできたのだろうと私は思うのだが、これははしかのように一度罹ったら二度罹らないというものではなく、免疫は不完全だから何度でも罹った。もちろん個人差はある。稀には成人してから初感染する人もいて、その場合は経過が長引くと思われていたらしく、定家は宣陽門院が三十歳で初発したことについて次のように書いている。

「建保元、八、五

宣陽門院に参ず。御不例の由を聞くに依ってなり。女房相逢ふ。去月廿五日より御発心地。昨日は重ねて発らせ給ふ云々。事の体定めて長引かせ給ふか。初めての御悩云々。貴賤長年の後初めて発心地、更に詮方無き故か。」

『明日記』に書かれている多くの例を見ると、一日おきに発熱して大体十日以内で解熱するのが普通であり、それ以上だと長い方である。その後いつか又定型的あるいは非定型的な形で再燃をくり返すのが普通である。

初発あるいは再発を問わず定型的な瘧の症状が現れるのは、本稿であげた例でもわかるように春夏秋である。（旧暦であることに注意）しかし稀には次のように真冬に現れることもあって、定家も驚いて書いている。

「寛喜元、十一、二十九

修明門院御発心地重ねて悩ませ給ふ。極寒の比尋常の事に非ざるか。驚くべし。」

暑い時に瘧が多いことは誰でもわかるが、中には夏の溜り水が怪しいということに気がついている慧眼の人もいた。しかしさすがに蚊が怪しいと言った人の記録はない。定家の従者の賢寂は定家の嵯峨の別荘の近くに自分も草房を持っていたが、年来の経験によるとこのまわりは水が多くて瘧の難があるから、夏の間は京の本宅に戻りますと、次のような手紙

を定家に寄越している。

「嘉禎元、五、四

此の草房閑寂と雖も、南に小河あり、敗塢（破れた土手）鳴動するが如し。流水西の垣より入り、潺湲北の方より出で、偏へに船筏の水に浮ぶが如し。春秋の土薄く水浅し。其の悪しき観易し。年来見る所、夏水の居る地多く瘧病の難有り。仍て京に出づるの志有る由告げ送り了んぬ。」

ここで瘧という字を使っているが、これは瘧の異体字である。内閣文庫所蔵の『頓医抄』(一一)写本には瘧の他に瘧の字も使われており、瘧疾、瘧病など振り仮名もついている。『明月記』ではここ以外はすべて瘧の字になっている。これはおそらく手紙に瘧の字が使われていたので、定家がそのままそれを写したものと思われる。ともあれ、この手紙の主の賢寂の慧眼とこの頃の人がいかに瘧病に悩まされていたかという事を見るべきである。

終りに

前報および本稿により『明月記』の中での瘧疾の主な記述は紹介し、鎌倉時代前期における瘧疾（マラリア）の実態をほぼ明らかにし得たのではないかと思う。マラリアの最終診断はマラリア原虫の確認によらねばならないとは言うものの、過去のわが国においてマラリアが相当浸淫していたことは動かし難い事実である。富士川の『日本疾病史』(一二)も山崎の『日本疫史及防疫史』(一三)も主として急性伝染病について述べていて、マラリアは取り上げていない。本論文によりわが国の疾病史の中でのマラリアの重要性についていくらかでも認識されることを願うものである。

文献

（一）『明月記』国書刊行会、昭和五十五年。

（二）今川文雄『訓読明月記』河出書房新社、昭和六十年。

(三) 中村昭「『明月記』における瘧疾の検討」『日本医史学雑誌』三三巻二号、昭和六十二年。
(四) 石田吉貞『藤原定家の研究』文雅堂、昭和三十二年。
(五) 服部敏良『鎌倉時代医学史の研究』吉川弘文館、昭和四十七年。
(六) 宮川米次監修『新撰熱帯病学』南山堂、昭和二十年。
(七) 猪木正三「マラリア」『内科学書』第一巻、中山書店、昭和五十七年。
(八) 村山修一『藤原定家』関書院、昭和三十一年。
(九) 九條兼実『玉葉』文献（五）より引用。
(一〇) 阿仏尼『十六夜日記』学燈社、昭和三十八年。
(一一) 梶原性全『頓医抄』科学書院、昭和六十一年。
(一二) 富士川游『日本疾病史』平凡社、昭和四十四年。
(一三) 山崎佐『日本疫史及防疫史』克誠堂書店、昭和六年。

（神奈川県総合リハビリテーション事業団
七沢リハビリテーション病院）

A study of malaria in "Meigetsuki"

—supplementary report—

by Akira NAKAMURA

Teika Fujiwara frequently wrote in his diary "Meigetsuki" of his chronic cough, which lasted his entire life. Previous authors have ascribed his chronic cough to bronchial asthma. However he described only a cough and did not refer to any wheezing or dyspnea. I diagnosed Teika as a chronic malaria patient in a former report and would ascribe his chronic cough to chronic malaria, in which bronchitis

is said to appear usually.

The Kujo family, which Teika described in great detail, also had many malaria patients. Yoshisuke Kanezane and Kanezane's daughter suffered from typical tertian fever and Kanezane's wife showed an atypical febrile pattern. Also, the Saionji family, from which Teika's wife came, had several malaria patients as well, according to "Meigetsuki," namely the mother-in-law of Teika's wife, Kintsune, and the latter's daughter and grand daughters,.

I surmise that the majority of the population suffered from malaria in medieval Japan. Furthermore, many persons contracted malaria for the first time at a young age. Thus, I believe that "warawa-yami (children's disease)" was, in fact, malaria in the old Japanese language.